



水頭症 ってなに?

どんな
病気?

脳室に脳脊髄液が過剰にたまり、
脳を圧迫して脳障害を起こす病気。

早期発見・治療で、症状をコントロールできることも少なくないですが、放置すると、発作が止まらなくなったり、脳圧の異常な上昇で脳ヘルニアが起こったりして、死の危険もあります。



おもな
原因

水頭症はもって生まれた先天的なもの、
脳腫瘍や脳炎といった脳の病気による
後天的なものがあります。

1 先天的水頭症

小型犬に多く、子犬のうちから症状が出ます。
遺伝的なものだと考えられており、小型犬に多い
ことが特徴です。多くは、脳脊髄液の流れが滞って、脳
室内に過剰にたまることで発症します。

発症年齢

生後6か月ごろまでに
発症
早いと生後2、3カ月
で何らかの症状があら
われます。

おもな犬種

チワワ、トイ・プードル、マル
チーズ、ヨークシャー・
テリア、ミニチュア・ダック
スプンド、ポメラニアン、ボ
ストン・テリア、パグなど

2 後天的水頭症

脳のほかの病気によって
起こります。

脳腫瘍や脳炎といった脳の
ほかの病気の原因で、脳室内
に脳脊髄液が過剰にたまり、
二次的に水頭症を引き起こ
すケースです。



おもな
症状

額が広がるなど見た目の変化、
異常な行動があらわれます。

外見の変化

- 頭部が大きく、額が広がる
- 黒目が外側の下方を向いている(外方斜視)
- 頭頂部がふくれてるように見える など



脳障害による症状

- けいれん発作を起こす
- うろろう動き回る
- 同じ方向にぐるぐる回る
- 足がふらつく
- 目が見えない(視力障害) など

検査

CTやMRI画像が
診断に有効です。

症状、犬種、年齢などから診断を行います。最終的には画像で脳室が広がっているかどうかを確認し診断されます。CTやMRI画像が適している、とくにMRI画像はより細かく脳の状態を把握することができます。ただ、麻酔がかけられない犬の場合は、頭頂部の骨の隙間から、超音波検査を行い診断する場合があります。

治療

薬による内科治療と外科
治療(手術)があります。

内科治療では、脳脊髄液をつくる量を減らす薬や、脳圧を下げる利尿作用のある薬、けいれん発作を抑える抗てんかん薬などを使用。投薬は生涯続けます。外科治療は、脳室から腹腔に脳脊髄液を流すためのチューブを埋めこむ手術で、若齢で進行している場合は症状緩和に効果的。ただ、チューブの詰まりや抜けなどで、のちに再手術の可能性も。後天的水頭症では、脳炎などの治療も並行して行います。

いずれも完治は目指せない対症療法です。治療中は、薬による脱水の予防、ふらつきによる転倒防止など症状に合わせた対応にも気を付けましょう。



いぬに多い病気、そこが知りたい! は「いぬのきもち」で連載中!

●こちらは、掲載した記事を再編集したものです。

アニコム損保ご契約者が
マイページから定期購読を申込みと
2号 (2ヶ月分) **無料!!**

しつけの壁の乗り越え方